

認知言語学の英語教育における応用 「分かる」という実感を伴う説明とは何か

田中茂範(慶応大学 / Action Research Center for Language Education)

佐藤芳明(慶応大学 / Action Research Center for Language Education)

加藤由美子(Action Research Center for Language Education)



「語彙文法 (lexical grammar)」

語彙項目に文法的情報が含まれているという前提を立て、語彙の意味(コア)から文法的な現象を説明する

構文と語彙的意味の相互関係としてとらえることができる文法現象を扱う




MAKE

コア < 素材に手を加えて産物をつくる >

コア図式入る

「姿・形を変えて」という部分と「産物への焦点」の2点が重要。
MAKE が構成する図式には「作り手」「素材」「産物」の3項が含まれる。



作り手: John 産物: wine 素材: grapes

A. John made wine out of grapes.

B. John made grapes into wine.

A. John [made [wine]] [out of grapes].

B. John [made [grapes into wine]].

cf.

C. John [wiped [his face]] [on the towel]

D. John [wiped [the towel across his face]]



動詞の作用域はモノに限定されず、コトにも及ぶ。
動詞の意味は使用されている構文に影響を受ける。

レキシカル・グラマーでは、語の意味(コア)がその語
の構文的可能性を説明するという立場をとる。



MAKE の自動詞用法

Ice is making on the pond.

(池に氷がはりつつある)

自動詞化により、「産物」が構文上の主語になり、「姿・形を変えて」の部分が強調されることによって、池に氷が徐々にはってきている様子が描写されている。



MAKEの使役用法

John made [Mary write a letter of apology].

MAKE 「事態の変化」と「結果の確保」が強調される。
「事態の変化」が MAKEの「強制力」につながる。

cf.

John had [Mary write a letter of apology].

HAVE 「ある事態を確保する」という結果に力点がある。
「所有空間」に「出来事」をHAVEするという発想。



GIVE = 「与える」?

1. The experiment gave [good results].
2. Mary gave [a sudden cough]
3. Mary gave [her coat] [to the hotel clerk].
4. give up , give away , give inなどの成句。

「与える」となる場合は、「人が誰かに何かを与える」という図式が作用し、受け手が意識されて、＜何か＞は譲渡可能なモノになる。



GIVEのコア

< HAVE空間から何かを外に出す >

コア図式入る



GIVEの構文的可能性

give A

cause A to GO [out of the subject's HAVE space]

give A to B

cause A to GO to B

give B A

cause the event [B HAVE A] to happen

(by the act of giving)



GIVEの自動詞用法

It's more blessed to give than to receive.

(もらうより与える方が幸かな)

A withdrawn person doesn't know how to give.

(引っ込み思案の人は自分の表現のしかたを知らない)

これら例外的用法においても、<何かを自分のHAVE領域から出す>
という意味合いは維持されている。



GIVE + 副詞 (up, away, in, etc.)

= 副詞 (空間詞) が出し方 (方向など) を表す。

give up 何かをポーンと上に投げる

give away 気前よく何かを出す

give in 自分のところから出した何かを
相手 のところに入れる
「提出する」「屈服する」



give A to B (cause A to GO to B)

この構文の特徴は以下の2点:

受け手が示される。

GOの意味成分 Aは移動可能、譲渡可能なもの。

a bookやa carのように物理的に移動可能な物に加え、
attentionやregardなど心理的に移動性が感じられるものも
この構文で受容される。

ex. You should give *special attention* to your diet.

Give *my best regards* to her.



give B A give A to B

1 . John gave [Mary a punch in the eye].

? John gave [a punch in the eye] [to Mary].


2 . [Mary] was given [a punch in the eye].

? [A punch in the eye] was given [to Mary].

3 . I gave John a book

? I gave John.

gaveの作用域は[John HAVE a book]全体。



GIVE B Aの構文的特性

GIVE [B A]

- cause the event [B HAVE A] to happen

cause a thing to go (モノを出す)

cause an event to happen (コトを生み出す)

この構文には「A = 移動可能物」という制約は働かない。
そのため、より多様な表現が可能となる。



GIVE [B A]

1. Richard Nixon gave [Norman Mailer a book].
2. John gave [Mary a headache].
3. Mary gave [the door a kick].
4. The captain gave [Nakata a kick at the goal].
5. The rust gave [the car a look of distinction].
6. Working too hard gave [John a heart attack].



Richard Nixon gave Norman Mailer a book.

1. ニクソンはメイラーに本をやった。
2. ニクソンはメイラーに本を手渡した。
3. ニクソンのおかげでメイラーは本を書けた。

Nixon gave [a book] [to Mailer]. だと前二者の解釈は可能だが、3の解釈は不可。



The captain gave Nakata a kick at the goal.

1. 主将が中田をゴールのところで蹴った
2. 主将が中田にゴールのところでシュートさせた

[Nakata HAVE a kick at the goal]は両解釈で共通



「二重目的語」構文のHAVEによる分析

1 . She sent me a fax.

She did something that caused the event
[me HAVE a fax] by means of sending.

2 . She wrote me a long letter.

She did something that caused the event
[me HAVE a long letter] by means of writing.



V+NP+NP [NP HAVE NP]

○ Open me a beer can.

--- [me HAVE a beer can]

? Open me the door.

--- [me HAVE the door]

V+NP+NPの構文が可能となるのは、
[NP HAVE NP] の関係が成立する場合。



HAVE 関連項目

～ 所有、存在、経験、使役、受益、被害、現在完了～

HAVE 図式 「XがYをHAVE空間に有する」

コア図式入る



所有空間のHAVEとその応用

- 1 . He has [a lot of money].
- 2 . We have [a problem].
- 3 . Mary has [long legs].
- 4 . The shoes have [mud] on them.
- 5 . I will have [him go there].
6. I have [to do it].



経験空間のHAVEとその応用

- 1 . Let's have [a party].
- 2 . I have [a bath] every day.
- 3 . I had [a good time] at the party.
- 4 . I had [my hair cut by my girlfriend].
- 5 . She had [her bag stolen] in the train.



現在完了形のHAVE

I have talked to my boss.

I HAVE [talked to my boss

[talked to my boss]をHAVE する

HAVE < 現在性 > と < 状態性 > を2つを強調。
< ボスと話をした > ということの現在への関連性と、
< そうした状態に今ある > ということを含意する。



< 行為の直接性 > が弱まるHAVE DONE

1. I cut myself shaving.

(髭剃りをしている時に剃刀で顎を切ってしまった瞬間に叫ぶコトバ)

2. I did it.

(ボクシングの試合で挑戦者がチャンピオンをKOした瞬間に叫ぶコトバ)

cf.

1'. I have [cut myself shaving].

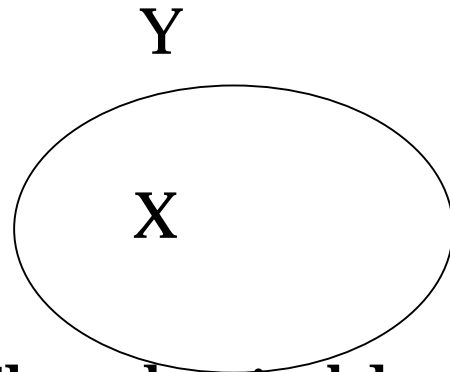
2'. I have [done it].

出来事をHAVE空間内で処理するため、< 行為の直接性 > が薄れる。

これらの表現は例えば少し経って回想するような場面により適している。

BEのはたらき

X be Y X がY領域に「在る」



The sky is blue. (状態の記述)

John is just a kid. (同定)

God is. (存在)

John is running. (進行)

John was sent to Thailand. (受身)



“X be ”の構文

X be Y

God is

Let [it be]

God is. では、Y項が埋められていない。存在そのものを端的に描写するには、存在場所のYを示す必要はない。

let は<あることを阻止しない、あるがままにしておく>という動詞。すると、<it で表された何かがどこにあると、それを阻止しない>という解釈から「成り行きにまかせよ」といった解釈が成立する。



ING関連項目

1.現在進行形

He is [running in the rain].

2.分詞構文

[Running in the rain], he met an old friend.

3.現在分詞の形容詞的用法

The man [running in the rain] is a promising linguist.

4.動名詞

[Running in the rain] is not good for the health.



進行INGの意味

ING

観察可能性

連続的動作の進行性（未完結性）

一時性（いま・ここ）



単純現在時制 vs 現在進行形

He *breaks* the cup.

スナップショット的（動きが観察できない）

He *is breaking* the cup.

ビデオムービー的（動作の観察が可能）



TO関連項目

TO

コア図式入る

何かと何か
「向きあう」
という空間関係を示す

X) (Y

115 yen *to* the U.S. dollar

They talked face *to* face.

dance *to* the music

the key *to* the door

I go *to* school at 8:30.

I want *to* visit Jakarta again.



to

I want) (visit Jakarta again

to

I'm happy) (see you



不定詞 vs 動名詞

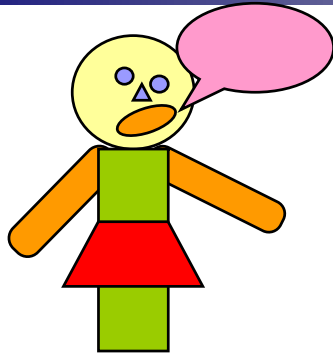
不定詞	動詞的 (遂行が想定されている行為)
動名詞	名詞的 (行為のイメージ・アイデア)

To see is to believe. 見てごらん、そしたら、信じるよ

Seeing is believing. 見ること、すなわち、信じること

Would you consider working [× to work] for me?

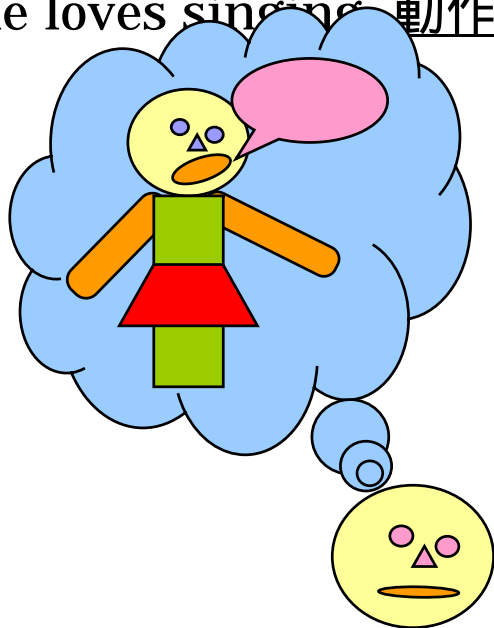
considerは「アイデアの可否を考慮する」の意。



INGの意味展開

She is singing. 観察可能な動作進行 「現に...している」 (現在分詞)

She loves singing. 動作進行の名詞概念化 「...していること」 (動名詞)



I remembers singing that song.

「...していることの記憶」

Please imagine singing this song.

「...していることの想定」

Singing can make you happy.

「...していることの一一般化」



法助動詞の捉えかた

Must < ある行為・認識に対して強制力が働くということを示す >

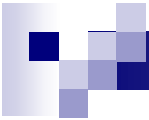
May < ある行為・認識に対して妨げるものがないということを示す >

Can < あることが実現可能であるということを示す >

根源的 (root / deontic) 用法

認識的 (epistemic) 用法

「力(force)」メタファー
の原理で接続可能
(Sweeter 1991)



must < 抗いがたい力 (強制力) >

You *must* do it. (義務)

That *must* be true. (確信)

「義務」 対人関係にかかわる行為

「確信」 話し手の認識にかかわる行為



may < 強制力 (障害・妨害) の不在 >

誰かが何かをすることに対してそれを阻止する妨害物がない

「許可」 You *may* come in.

誰かがある事柄に対して判断をすることに対して妨害物がない

「推量」 It *may* be true.

「許可」 対人関係にかかわる行為

「推量」 話し手の認識にかかわる行為



can < 実現可能性 >

エネルギー(ガソリン)がたまっていていつでも発車できる状態

「行為の実現可能性」

「(能力として)...することができる」 I can cook.

「(事情が許せば)...できる」 I can visit him tomorrow.

「(許可)...してもよい」 You can come with me if you want to.

「(依頼)...してください」 Can you give me a hand?

「状況の実現可能性」

「(肯定文で)...ことがある」 Watching TV can be boring.

「(否定文で)...のはずがない」 It cannot be true.

「(疑問文で)...だろうか」 Can it be true?



WILLの意味機能分析

- (1) Tomorrow is [?will be] Saturday.
- (2) It will be [?is] fine tomorrow.
- (3) He will be [?is] 19 next month.



WILLの用法展開

第一人称の意思は表現できる *I will help you.*

第二人称の意思は代弁するか、*You will go there.*

あるいは問うことができる

Will you come with me?

第三人称の意思は推量される *He will do it.*

意思が背後に退き、推量のみが前景化する

It will rain.



The door won't open.

Accidents will happen.

He will always try to show off his intelligence.


A: Where is she? B: She will be in the library.

A: How much do I owe you? B: That'll be 20 dollars.

I will be grateful if you will help me.

Let's go when you are [× will be] ready.

I will stay if it rains [× will rain] tomorrow.



疑問詞から関係詞へ

I don't know [*who* came to my house yesterday].

疑問代名詞

I don't know the man [*who* came to my house yesterday].

関係代名詞

the man	<u>who</u> came to my house yesterday
その人	<u>誰か</u> というと 昨日私の家にきた(まさにその人)



WH - のはたらき

- イ．相手にたずねることによって、情報を得ようとする（情報検索）
- ロ．相手にたずねることによって、情報の中身を確認する（確認作業）
- ハ．相手にたずねることによって、注意をひきつけようとする（注意喚起）
- ニ．相手が答えようのないことを、あえてたずねる（修辞疑問）
- ホ．問われた場合に答となる情報を提示する（説明機能）

- ヘ．先行する名詞がどのようなものかという説明をつけたす（後置修飾）



WH の構文展開

I . 疑問文を導く

問をたてて答をもとめる

II . 間接疑問文（名詞節）を導く

説明機能をもつことがある

III . 先行名詞に説明を加える節を導く

後置修飾の機能をもつ



先行詞のないWHAT

? WHAT = 「先行詞を含む関係代名詞」

○WHAT = 「先行詞を含まない関係代名詞」

「具体的な内容を示さずに、漠然とモノ・コトとして提示する」
というのが関係詞whatのはたらきで、疑問詞と連続性がある。

[What's important] is that you do your best all the time.

[What's important?]

何が大切かと言うと…



関係詞か疑問詞か

1. What are you talking about?
2. I don't understand what you're talking about.
3. I'm not interested in what you're talking about.
4. What you're talking about has nothing to do with the matter.

1.2. は「何」という訳語が充てられ「疑問詞」とみなされる。

4は、「何」という訳語は無関係なことから「関係代名詞」とみなされる。

3は、関係代名詞とも疑問詞ともとれるあいまい性を含んでいる。

「あなたの話していることに興味がない」と訳せば関係代名詞、

「あなたが何を話しているかに興味がない」と訳せば疑問詞となる。



先行詞の動機づけ

Who is he? 彼は誰ですか

人であることが前提

Which would you prefer? どちらがより好ましいですか

限られた数の対象が前提

What is that? あれは何ですか

物？人？（前提となる集合ワケがイメージできない）



「関係形容詞」のWHAT

What do you like?

何が好きですか？（疑問代名詞）

What color do you like?


何色が好きですか？（疑問形容詞）

I gave him [what I had].

私は[持っていたもの]を彼にあげた（関係代名詞）

I gave him [what money I had].

私は[持っていた金]を彼にあげた（関係形容詞）



5つの「名詞形 (noun forms)」

APPLE

{ apple, an apple, apples, the apple, the apples }

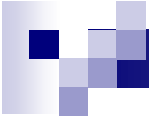
apple 「切り刻んだ(すりおろした、ジュースにした)リンゴ」

an apple 「1個のリンゴ」

apples 「複数個のリンゴ」

the apple 「特定される1個(または無形)のリンゴ」

the apples 「特定される複数個のリンゴ」




冠詞を理解するための理論(1)

対象認知理論:

名詞形が「a + 名詞」か「 + 名詞」かの判断
差別化の鍵は対象の単一化が想定されるかどうか

“ a + 名詞 ”	単一化の想定がはたらく
“ + 名詞 ”	そういう想定ははたらかない

aのイラスト1 (リンゴ) と2 (砂と小石) 入る



冠詞を理解するための理論(2)

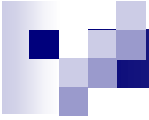
情報共有理論:

対象が状況内的に指定可能であるかどうかの決定

指定可能な場合 “the + 名詞”

指定不能な場合 theの使用を控える

theのイラスト入る



単一化原理による名詞分類

固有名詞: 対象と固有の指示関係を示す名詞。指示対象が一つであるため、単一化は作用しない。大文字で示すのが特徴。

ex. William Shakespeare, George Bush, Britney Spears, etc.

一般名詞: 単一化可能な有形の対象を指す名詞。

ex. a desk/desks, a tiger/tigers, a cup/cups, etc.

物質名詞: 計量可能な無形の対象を示す名詞。無形のため単一化されない。

ex. water, air, gold, etc.

集合名詞: 複数の一般名詞を集合的にまとめる名詞。有形の知覚対象ではなく、集合的概念であるため単一化は行われずa はつかない。

ex. {sofas, rugs, chairs, table,...} furniture

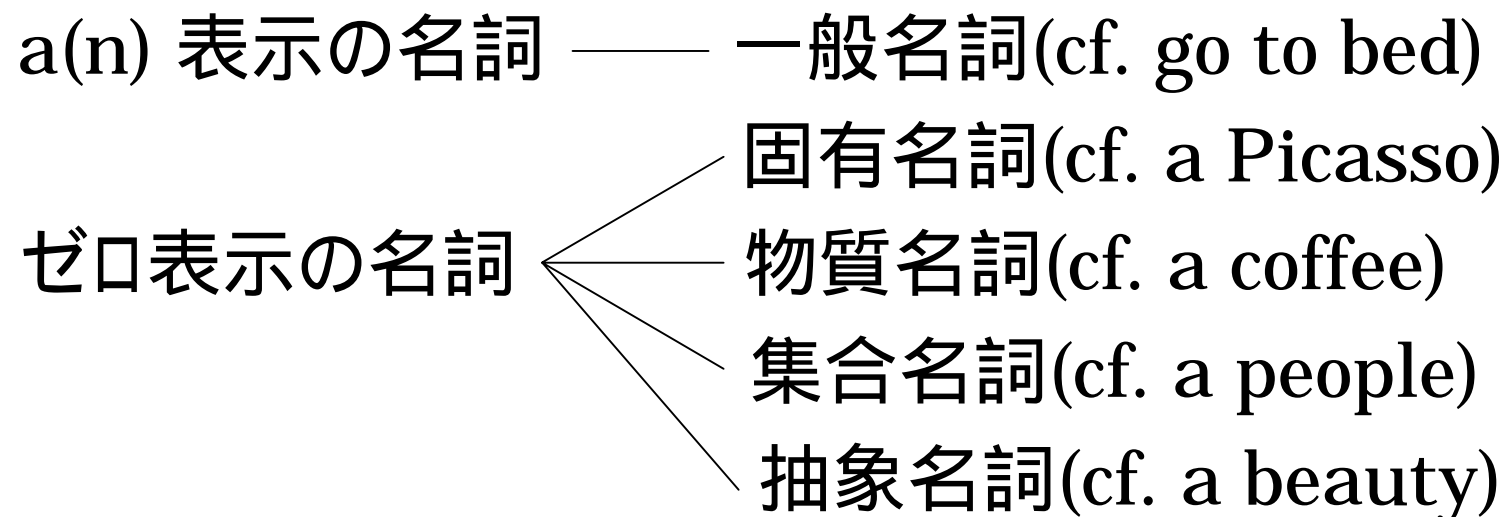
{dogs, cats, tigers, horses,...} animals

cf. Look at those animals.のanimalsは一般名詞

抽象名詞: 単一化できない観念対象を示す名詞。

ex. ethnicity, love, justice

a(n) / の選択 (+ 例外)



「a(n) 」の変換は、抽象化により単一化が作用しなくなるときに起こる。

「 a(n)」の変換は、なんらかの理由で単一化が作用するとき起こる。



Does she play “piano”?

1. She plays the piano.
2. She plays a piano.
3. She plays pianos.
4. She plays piano.
5. She majors in piano.
6. She bought a piano.



THEの共有感覚

(1) 常識的共有：一般常識の共有

The earth goes around the sun

How can I get to the post office?

I couldn't use my car. The tires were slashed.

(2) 文脈的共有：

2-1 先行状況の共有

(I bought a cat.) The cat always makes me comfortable.

2-2 指定可能であることを予期

The man I'm going to introduce to you is

(3) 指示的共有

Look at the car across the street. It's a Mustang.



the + 固有名 (1) 複数形の場合

the Netherlands


the には指定機能があるため、分散している要素を束ねてある対象として指定する。そこにthe Netherlandsのtheの意義がある。典型的には「山脈・国・諸島・家族などまとまりを示して」用いられる。

ex. *the Rockies* ロッキー山脈

the Philippines フィリピン

the Hawaiian Islands ハワイ諸島

the Nakamuras 中村一家



the + 固有名(2) 省略を含む場合

The Hilton(ヒルトンホテル)

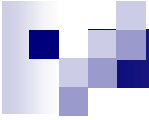
Hiltonだと人名になってしまい、そのままホテルを表すことができない。

そこでthe Hiltonとすることで何かが省略されていることを示唆する。

ex. *the Shinano* (River) (信濃川)

the Pacific (Ocean) (太平洋)

the Sahara (Desert) (サハラ砂漠)



the + 固有名(3) 修飾語を含む場合

「修飾語を含む固有名」は、通常、修飾語がつくと、an angry Billやa new Tokyoのようにaをつける傾向がある。そこで、それが固有名であることを示すには指定機能を持つtheで特定化する必要が出てくる。

ex.

「海・半島・渓谷など」(the Sea of Japan / the Korean Peninsula / the Grand Canyon)

「船・公共建造物・鉄道・橋など」(the Queen Elizabeth / the White House / the Tokaido Line / the Brooklyn Bridge) 「官公庁・団体など」(the Ministry of Education / the World Bank / the American Medical Association)

ただし、同じ都市名でもニューヨークはNew York、ブロンクスはthe Bronx のように歴史的な経緯による違いもある。人の名前と同様、個々に対処していくことが望ましい。

集合名詞の認知論的タイプ分け

FURNITUREタイプ（単数形）：

configuration / arrangementがカギ。集合全体のみを示す集合概念で、単一化されないためにaがつかない。

cutlery（刃物類） / crockery（陶器類） / kitchenware（台所用具）

clothing（衣類） / equipment（器具） / fruit（果物）

ANIMALSタイプ（複数形）：

集合（複数）と個体（単数）に同じ語で言及できる。集合名から典型的な個体がイメージされやすい。 vegetables（野菜） / birds（鳥）

CATTLEタイプ（群）：

個体より群によって対象が認知される傾向がある。

fish（魚） / police（警察）

f. sheep, carpなどは単複同形の一般名詞。個体が群と分かち難い感じ。